

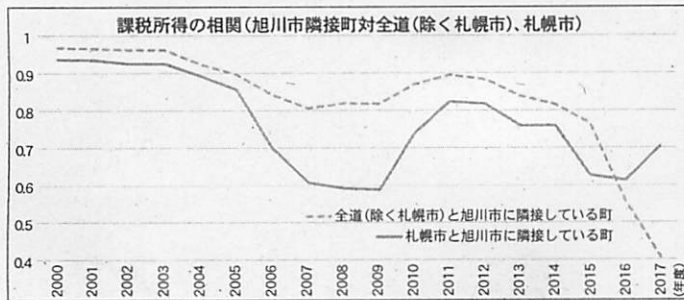
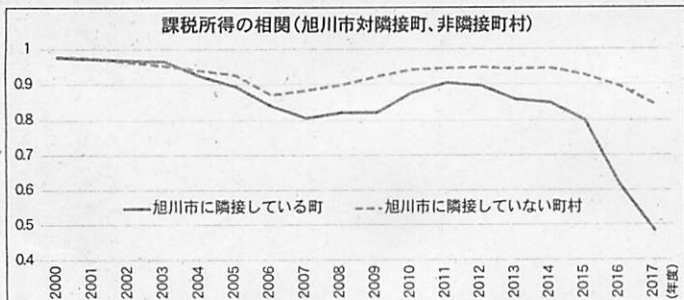
日銀旭川事務所長のみた
旭川シーン
SCENE 14

今回は、総所得金額から所得控除を差し引いた課税所得を使って、まずは旭川周辺の地域で生じている変化を見てみましょう。そのための手法は極めて単純ですが、統計の概念を使うので、予備知識がいくらか必要です。二つの統計データを比べ、一方が増えたとき、他方も増えているなど、両者がどの程度同じ動き方をするのかを測る統計値として、「相関係数」があります。両者が全く同

課税所得の相関(前編)

じ動きをすれば1.1、全く反対に動けば-1.1、単純な線形的な関係はないようなら0の値をとり、統一的な基準は決まっています。絶対値にして0.7から1の間は強い相関、0.4から0.7の間はまずまずの相関、0.2から0.4の間は何がしかの弱い相関は存在、といった見方をとることが多いようです。

上川総合振興局管内の十九の町村合算の課税所得について、旭川市との相関を見てみました。一九八五年度から二〇〇〇年度までの十六期間の関係を終点の二〇〇〇年度のデータとして、その後、



資料:総務省自治税務局「市町村税課税状況等の調」

どうかで二分(以下、非隣接町村と隣接町としまし)としてみると、非隣接町村は相関の度合いが薄らぐといえ、まだ強い相関を保っているのに、隣接町は近年急激に相関の度合いが薄れているのが分かります。

ここで、隣接町について、相関を測る相手を旭川市と札幌市に分けてみると、旭川市との相関が落ち込む一方、札幌市との相関が高まっています。隣接町が直接、札幌市との経済的な関係を深めているのかどうか、単純な相関係数だけから即断することは到底できませんが、隣接町の課税所得は最近、傾向的に上がっているため、その上がり方が、旭川市というより、札幌市など課税所得が上がってきている地域の方に似ているとは言えそうです。旭川市に接する東川町や東神楽町は、人口でも二〇一四年から二〇一九年にかけて増加していますが、旭川市も参考にすべき点が身近なところにあるのかもしれない。

【中本浩信(なかもとひろのぶ)】一九六三年東京都生まれ。東京大学法学部卒業。支店は鹿児島神戸に勤務。二〇一八年八月から旭川事務所長。趣味は絵画鑑賞。

映画「Back to the Future」(一九八五年)は、ふとしたタイムマシンの誤操作で三十年前に遡った主人公が、その夕

イムマシンの若い頃の製作者や自分の両親と会って、現代に戻るまでのドラマをコミカルに描いたSFです。三十年後の未来の旭川市民が現代にやってくるなら、現状をどう捉えるのでしょうか。「せめて、あの時にこうしていたら」。そうした分岐点は、今にも経過しようとしているのかもかもしれません。(毎月第四週に掲載します)



ロータリーから、6本の分岐が伸びる